

川紀行

白々とした、未だ明けきらない朝の凜とした空気の中、その一步を踏み出した。風はない。しかし、あたり一面の濃い川霧が空気以外の何かの作用によって、ゆっくりと川下から絶えることなく流れ続けている。暗さとその川霧によって遠方の様子をうかがうことは出来ない。足元の視界のみが頼みの綱となる。確かに、足元を流れているのは川の水であるが、冷たいとも暖かいとも感じない。経験したことない感覚だ。それが、心地よいとも不快であるとも言えない、不思議な感覚と表現せざるを得ない。まだ、歩き始めて間もないのだが、その深さはくるぶしの直ぐ上のままである。どうやら暫くは、この深さのままのようだ。川底は足裏から伝わる感覚として、玉砂利のようである。石ころ程大きくなく砂粒のような細かさでもない。それにしても、綺麗な水だ。普通の川では、川底が砂利の所を歩くと、砂利の中から煙幕状の泥等が噴出してくるものだが、全くその気配すらなし、濁りの微塵もない。きつと、その清浄な水により、五劫の擦り切れ(ず)の時間をかけて一切の汚れが洗われた結果なのだと解釈した。とうとう、この様な場所に脚を踏み入れたのだと考えると、昂揚感と緊張感が交錯し、目から汗が出た。

明るくなってきた。目標は可能な限り、西方に近づくことと決意し、目指しているのだが、脚を運んでいるその方向から陽が昇りつつある。頭の中が混乱した。持ってきたコンパスを確認した。針がくるくる回り続けている。GPSの表示も意味不明・解読不可能な表示となっている。腕時計を確認した。反対方向に針が回っている。しかも短針が秒針の速さで逆に回っている。予備のデジタル時計は予想通り、勢いよくカウントダウンしている。立ちすくんだ。入ってはいけない所に脚を踏み入れたのだと嘆きしめた。

ふと、歩いてきた後方を振り返り確認したが、もう何も見えない。戻るべき方向も定かではなくなってしまった。唯一の手がかりは、川の流れが反対に見える方向が戻るべき方向であるということだ。しかし、冷静に判断すると、この川の流れは何かの力によって流れている訳ではあるが、それが何かは分らないが、重力ではなさそうだということを、うすうす本能的に感じる。東西南北という物差しが全く通用しない異次元の時空間世界に自からの意識と肉体が存在しているという事実を認識せざるを得ない状況である。

それにしても広い川だ。川幅何kmか？などのくだらない疑問は、まだ前世への未練や執着の心理の一つの表れであろう。どれだけ歩けば西方に近づけるのだろうか？この疑問も向こう岸(彼岸)に必ず辿り着けるとの恣意的な主観の表れに過ぎないかも知れない。その向こう岸が必ずしも目標や目指している西方であるとは限らないし、そもそも向こう岸があるのかも定かではない。また、もうここがその西方であるのかも知れない。

川紀行

戻るべきか、進むべきか、戻るべきか、進むべきか・・・随分と逡巡したが、結論は前進。理由はもう戻れないと悟ったから。いくら自意識があり、身体が全く衰えていない状態であっても、今存在しているこの環境を変えることは出来ない。もう前世と同じ環境に身を置けないと理解した。時間軸が異なる空間に紛れ込んでしまったと観念したからだ。

もう、気が遠くなる程歩いた。だが、不思議と全く疲れていないし、空腹感もない。気持ちだけが、前に進んで行かない。風景が全く変化していないことが、前進しない主たる理由となるのであろう。1) 前が見えているのに風景が変化していないことが全く前進していないとの錯覚を誘因させる。2) その先に目的地・目指している場所があるのか全く分らない。という心理状態がその原因となり得るのであろう。1) 必ず西方はある。2) 必ずその地へ辿り着ける。との僅かな期待だけが前進への支えとなっている。

突然、河原が見えてきた。とうとう辿り着いたのか。入口なのか。徐々にその様子が見えてきたが、想像していたものとは少し違っている。さらに近づいたが、何の変哲もない単なる河原だ。西方にしては殺風景ではないかと思われるし、入口にしても寂しい雰囲気だ。何か違うような気がして、一旦脚を止めた。よく周囲を眺めてみると、所々に石積みがある。所謂ケレンだ。人為的な石積みである。ああここが賽の河原かと胸に刻んだ。

賽の河原を後にし、暫くは水が無い所を歩いていたが、また水のあるところに辿り着いた。どうやら賽の河原は、中洲のような形状であることが想像できた。しかし、今度は水の流れる方向が、賽の河原以前の逆である。また頭の中が混乱した。本当にこのまま進んで良いのかと不安になってきた。そう言えば、ここまで随分歩いてきたが、誰も見かけないし、誰も出会っていない。追い越していく人がいても不思議ではないし、追い越すべき人も全く見かけなかった。向こう側から来る人は考えられない。道を誤ったのか。

突然、足下が掬われた。急に川底が進行方向に崩れ落ち、そのまま、成す術もなく深みに嵌った。流された。元の位置まで戻ろうと必死で藻掻いてみたが、流されるままだ。暫くはこのまま流されるしかない。しかし、流されて至る処は西方ではないことは明らかである。これではいけないと思い、また必死で藻掻いてみたが、ますます深みに嵌ってとても苦しい。前世を離れ川に脚を踏み入れたことは、死を意味するが、その川の途中でもう一度死ぬのかと不思議に冷静さは保っているのだが、とても苦しい。これでは到底西方には辿り着けない。苦しい。死んでしまう。残念・無念とはしたくない。救済してくれ。

意識が戻った。どうやら目覚めたらしい。穏やかな晩春の休日、夕日を眺めている間、ほんの僅かな時間眠って意識を失ったようだ。土手にタンポポが咲いていた。